[illegible]

特別
イ4
696
37

一 はしめんにたとへし女郎花紅梅ハ古法
山吹色のそめ紙にて染なせし物なり
百合なとも 一 むらさきの藤なといふ名
佳人のよしを詠ミ(?)けり
一 躑躅桔梗ハ龍胆の類にてあるなり
めてたきもの也(?)
一 花ニ是非一画のつけ所なし
詩歌の花鳥(?)ハ尤

特 イ14 696 37

二

玉泉文庫

座本 葛屋源之濤

二番目
江戸 関八州繋馬
嵐喜世三郎 中村野塩
大谷広右衛門 市川団三郎
嵐三五郎 三条勘太郎 中村勘三郎

名乃霞みだれ絃

あらた蔵 ますます 女舞剱紅楓

おんなまひつるぎのもみぢ

本町九丁目 角屋吊右衛門板

[illegible]一巻[illegible]

[illegible]のぬ

右は享保元文の年比の姫[illegible]

夢の跡夢の後乙子姫[illegible]

[illegible]追と[illegible]しぬ

天保十三[illegible]

珍書を集る一斎人

續[illegible]

乃ぶ川 寐もの玉櫛

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

張州 呉下 戯言抄

[illegible]

元文元年の春の比 張州名古屋の
城下の辺西の小路寓せし人京都の色町
破壊の時相応の歌をよみし

新歌仙序

夫田舎苦け花庵りし時ハ事ありかきる
来りかゝし京ふ人の歌と名色の花多く集ふ
志く間数澗く歳月を経む蜂の声をと
るげかしふかうし言くの別れを京行は
高きふ撥しくしうろさのやりしきい

李神記 前之

一度かり 松ハたけこ木のゑふのごとし 此寶ノ屋比
乃其ハまく 維子のめん多書を見る 屋 口ずさみし
文覺 駒馬 膳の取ゑんされハ世ふあうり事
ここちくい 庵士の雲宗の孫となり 二階庵安の名
ぬの月さし へいし 衣がうしの 橋り 霞あり ひとく
ろし 蓬の峰 仕義風となり 孫男ふ 氣ミ見ゆるづき
花さえて あき名孫 さんろう 氣を得し たうと
風ミ見よりて 聖くかし たゝぬ 名つその八二十日を
伝りし 一る庵云

于時
白鳳[illegible]出入日のべ 立夏年卯月十五日

天智天皇

かくれなき修行者のうへに笠をあてゝまことやかけハ害ふ居つ

持統天皇

東云ゝ 喜天火ふ焼り 為ふ孫 さらり一町 天あこま下山

柿本人丸

若しりの玉 ぬし多さ 仕拂ふ 中く仕切る人ハ有まし

猿丸大夫

奥山に深ふある 仏ゝ 徳之長ゑ為 新寺二度のあとぞかし記

山辺赤人

立ぬうちに打こし見れば白妙のかすみの袖に雪のふりつゝ

蝉丸

小菜の子で行もかへるもぬれ〳〵諸ともにきるもきぬも大方はなく

喜撰法師

我庵は都のたつみ壺掛世をうぢ山と人はいふなり

小野小町

花の色をうつしゝ顔(かほ)を流にうち流しては七(?)本(もと)の写に

僧正遍照

西の風ふきくれかよふ雪気ふきてハ女(をと)の顔ニちらしこまん

陽成院

ちくてんの三絃の糸の源川恋て積りて網となりぬる

河原左大臣

花の衣は古手染る店までも皆乱れそめにし今かわるらくに

伊勢

何とまるつくりもまゝて武士の家(あまれ)は身を流れてよいで

紀友則

ひさ日の光にはぢく春の日はせまきやうて異毛ぬくらん

人ハ行事ハかならず仕そろの御事むかしかうこんにんのかなしみ

紀貫之

凡河内躬恒

つゐそれにかならずものかなかるいかなるおさまりもちたる者なり集しして

古今和歌集撰者

平兼盛りしきりおなき家ハかしかへりて又後仕義とハ

十六歳

元文壹年

新今ハ法文長述日法義人中言納ハ除法要職と

法華経一部のごとし諸宗も法華経を本とし諸経ニ

と御伴の役ハ増長天王左右より金剛経を

仕合を致し大菩薩新経百五十年余をなし

上て行経授経し所ハ向後貌人を

大文新人五月日

今年禄后の役

今に有之改元也　摂家大臣

かし

法相宗元禄改して元禄改ハ宜敷事なし

△華からかへりてまたもとしより安緑ハ出す節輔人をうらんせ　又せこく

五智り立よ遊り金帝り宗九一かへつて天下泰平

元文元年吹改暦

一たいせい金銀　亥の方　此方にむかひてあらたむべし
一大らん　申の方　此方にむかひて金銀つかふまじ
一大将軍　より寅の方　假し出せず
一大さい　卯の方　あやうし
一大おん　辰の方　大小名へ金かさねて
　此方ありまし
　此方にむかひてむかふまじ
一大名ハ隠して　たり一此中なる金銀で八まをあまふ
一新銀ハ如きず　中すミ一いろく国へ難てふる
一元文ハ新銀ハ人気ある　あまん一新仁ハ以前不銀り　ミ川

一新古ハ此後金を　のそく一新吹ハ当利の錢を　ふる
一こかく世ハ　たりて一両替ハ出来る此後ハ外の金　まる日
一從来ハ　十方くれ一職人ハ此ころ
一日本国の金を　八せん一金銀ハ　天一天上
一吹替く　入梅一此金ハかりて　ふみ日
一諸ひのさは　大名日一金銀かりては　かく日
一此末のせいニ　あまん一世上一統り　大ぜい
一吹かへを出したり　二百十日一下地の年を以て町人の心をひがん
一ニしでく　以上

金七八日志さく三ケ分（三分一付て東ちよりけちらしめて引入
銀八月志らく此分　右済ふて八見くかくし
六六六をかけく東ちりうけそしめ
右ハ入
上納を致上さへ八[redacted]　大切
来て又此つ丹如ふし上る　せんぎ
右家座八皆的く　天下泰日下おもし

石山座中記　此年宗服ありけり　おさしくそとそ

一算用あいて　壹取口一代口ぞ八　若預け
一此年切系　此せ色を　ぬり菓や一金前のむき八　えずり
一今ふきと古吹とのあいうけ一今上の銀ふつふすえと八匁

一今上の金にいきて外れ見へ（悉納たり）を　壹井一　壹両に六百六十六匁六分とそのハけそれ　せし
一お庭のさうらよ御守る　此銅のかうい　石山一統をもせむの入用と　悦の意
一今まかしの色ハ皆紫銭ア　おうむいかうし　気ぎりさん女し

宮古路国大夫浄瑠璃ぶし　金子村蔵　あぜん線八　私日當地心中ノ男女

順りやゆくおしゐやそうらんまでやおまへ中が
此合点て御の其の出つきハ指をするのか當惑と
おまへの金か出やせぬし所りすつるい此それの
為かりつしかるをつしいうそか謎りとうりの
小判の金それに切くおまへにみせてかすたいとかさて

おまへハ此國此の時分に十五才になる此金
頭取へ売わたし志ひの左衛門の元手にてしひ
てしはやのなんをのがれ内金屋と一家の娘
末ハ夫ふして々ふしてこはゞの仕事をえんてひつし
手跡の事そこそいたみてあまりてちかしかあまち
それからけつしう捨ふかきずやちさき訛
女へやらに其場の遠ふりし秘ハ半年
源兵衛 かき
たみもの

日本ハ　たひのひし一丈ハ　上下の寸法
年華ハ　南天の年一人をハ　女の代銀
無名ハ今の名　見たる吾名知
年なりハ太郎にて大せん辰の年極ちたるより元文元年ケツリ
水そハ小判ハ金を出して紀伊の国毎ゆへや天下ハ尾張之邑
皆くまい半して白へなりかいてせず歩銀人をみせてかよ
三国小粒
毛屋新小判　比類無き代物
芝の蔵松志よ海よ日本の金よ銭金かへて惣人
ありぬ思　沢山無小判を引替り六割ぎの場所

より浪になりて　わしハ鍋の中からが出て　さうに
弱ひにある身をやしや法の二ちまくの徒役ハ
ありいりつけぬ成ハ鍋何のあてもなくて商人ハ
かしちの物を論みあるしまかしあてもせよ仮ぞるまで
見るなる金どうあるとそして従来の人のあきなふ
よふの人ヤスかなしそうちらふにころし
たく吹出ス金しまさめて物ならに移れ金のはし
小粒洞にあうりけ三宝にまで大かなし
思ひ分りけんの小判さへ渋して入る金付

や金ましたれしく　と徒ハあいはしいつみ
つ番所方にあるハ所なれハ心よするる浮浪
商人心とへつきりん　しかしや金にて度かつ置
度長小判しはなちして出おて出いし
まちつきれしをあらい面難にたりれて吹あ夕
計りが見吹さまつほしつ思ひ藤に寄るまたの
去くあくいれきとスや法まる人の身の上も古川
無數いれハ浮世のあるが浮世の身をやそ種
見へてり乾金のちいさく金をたやとうるさ

志く或ハ新金をまりを何く多めかわんと流来
せし今ならハ了しかくり候人ヘりハ
お替ぐ正用せさし紀文の二方通用果かし
いつくに付下ケ取りし候ハゞ世の中やみて
となりし世の中ハ今との候しものちん
の姫つ信教さらかし己以前之今に法の
さん為し高し東なかの世す汁はうら小判を
小手以下ハ人々にのつ勢よや今以ハ之し今
国の在りの人にてる今なハ論今の所か参来

高手業疵病之付所々益し世界の宝
なし立金漂名ハ大坂の所々人作無し
あらそひ金井の所々名ハ参りなかし人の覧来
取よくよくせし合せうる挽

商人合代なしまか

令別して勢守紀前村国前山元勤ち此文
勝たいふみハ及金沢の土か享保年中か此様
審候ある此事帳

一 柳国新山元勤与ハ新以来今出川の所其上より

諸人男女皆七合羅屋の新ニ作りニ而有ける

ハ諸人酒ニ来混乱大子の出作之新出者ハ字

保合無別ニ而持テ入亜銘家流と称号之

一帯立　かりそめのし女事仕様使より
流りて者ニ後段の出作より

一猩立　諸人太郎え之切切ハ不節者無段
長範の出立

宝而

一くんど郡段

此段ハ徒段大内拝村ニ而
此段ハ則従ニ

武蔵国住人毛徒若年

此段世界不ハり也ニ付出合ニして出出しける如段之

此段つ様也世ハ世界哥しぬ著ハ段なり

一茶ニ長今ハ人手の能見ハ大宮の出道立たるを

世界酒清の色立まて諸人寄而ニて

一来りて[illegible]著者んの掛出見ハ元女大子の

出不作之

一きしの今会茶や上人の出敢見ハ小野の

真座の草たり

一中の姫のんど　此段ハ蛛の巣上ニ織たるを

段切り様をぬ作ハ宗様の御経心者一部た

一乾金諸人寄致の事　元禄金にて吹直り又あらため
一所々薬種屋商売の事　諸人金銀通用の事
一寛永通宝現金通用札　是ハ大仏ものの事なり
一吉田帳売買の事なり
一銭又ハ源氏与ふ　諸人は方遊気ある脇通り
金仏の銘の所中ハ鋳ざるなり

一元文二丁巳年四月皇都大風大雨民家破壊窒苞下
一同五月東武如京〇五月三日江戸火焼上野山
一日一夜十里之外〇五月十一日尾張藩大焼赤塚三百餘間

一元文三年戊午十一月十二三日比ゟ尾州知多郡
野間大坊前血池変異り神ともいふもの
中三寸程なる常のことく赤き鮒の様なる十五六ゟ
頃まで廣かなり鯉ありし比迄常の如く水色ゟ
黒く晴候而血色になり日二三のことくなりて赤き色
又々浮出て廣く池中血塩深く東方
ゟ又ハ而水も赤く見る事大三ヶ所一ヶ所
丸く此所方形又凡四間八ヶ所大分所に出
赤く色も次第にひろかり池の大方赤くなり

方言かくあしきこ三尺斗常しあり文字あり
七ツ比中納言尾州にきこ人斗し中一ヶ字だてこ
ヤ〜十二り〜軒方二日三日火ゟつらさし也
一元文三十二月　卅日　江戸火事　元文四正月二日尾州名大手
同正月十二日江戸ゟ中納言様御帰り仮付也
狂句　金数寄にて思ひ切賊仍西郷徊こそ読
妻錦のかけや大般若経利根　漏れ政要たしの手紬
西小路やとまえたまけ成戻て　袋細工小袖一群
時行りと掛行槌み踊る成　武蔵はまつ〜但あそう好

詠う庵人の笠や衣裳子秋の風　斗りありて水にて
麻柿の色海川小さくあつり　名文蕎麦子も来る御売
領城子の花小髪毛抜掛そ　清く小町けと見金
恋ひ子八全子流世る菓寫　乾御扇を添えし右膳
多く之ち奉行中橋十文字　たて式を利て信ぞ不残切りとうり
桃灯子朱印の太の好きなれや　雛遊び好き陪女や相当
二
野郎盛んの浄用集る高小別　笠にて着の弊絹纐纈子
我今子待情ゆさき逢　法る方端の指し下行
分りと行く血流し子浦し　渡廣竟せつなれ浅子

素卯郎よミ春の尾張半　にて当人也りに智恵、
そ丹　丸葉ゑの河原の口出陰　出来なくても、作而
走町迎て有夜の出し置　あらし、此七字深見れ
ニウリ
都乃男女の人也て二人あ　其の業也人出し許ゑの尾
まふしと総花も御座峠まて　虎の皮花の着ハ十度
かれ弄る往生ハ歌の桃町　隠代大さ之敵よ出る

一 川内小作川能あ組

一 シテ不知
二十妻　此白い都のとすゑ人　ありハ京のさて不さそ　カワりゑそ古身のさて

一 星
萬年　末代の加摩只川　自宗の名識も也ケて候ゑ人

一 能丹
高洲　月民の見て慶既也て

一 如年
出宅　此出てく平代　ちゑ人出る

一 竹
雁生つ　あつハ名御けそ　あけよ乃り

一 花
耶郷　みしさ女く　てもりりく

一 甲斐
松波　おりとてそして　是非を見ゑ

一 醤油
八島　我か当もそとはとて　都ゑ御子むせ候

一 松前
力鰍　あけへとも出くとも　けひたあさの候あ

一 木村宗
金剣　あせへとせあすぐで　まい絶あそ出れり

一 御兵
鉄蝦　りその雨ハ迎花ツ　らんせよ御まへや

一 不知
芦刈　いなさくさまい　まくさまい

一 猿
小姫　さへのあるぐ段　あやとや人のこと

一 河然
弓八幡　是乃日出と行く　御子ゆめとそこ又

一 御布
居士　のずれりつや　栖人京

一 永村流
桁の木　いやし本好も季の年と　あ皆へく来をむそ

一 木新
歌生ん　やうそ衣行物　ひめら

一 七十不知
程々　出まくよ留実の　ミとあうそふ

そもそもきにはりけこの君とも申とかけめさまによ（きとめ）御福く
この君をば正月当地にはあさんしてさうそく菅宿にしおおい
ならびき右大臣の神とかうらうおにこにんしてなき
いとの詫そめしさて都んせうをおそくおいでかるもな
おん身のいきもくけれんばなきことにてごんすを俵くかなの
字も能登あら〳〵がいなや筆者のおちゃくこ評判が高き
今では青よりも通さ〳〵こんふ八番評判よまして也ことで
香もるゝこの梅の本逢枝振りとがんたもんとちさがなき
よひとの恋重二番でまれへらのつく右はや

上上　　若松屋　そよ

(西方)ますぐ外に女郎ともなきそのころにおそよ殿と申せしは何事ぞ(きゝや)それ迄は花さんの位こそ見ませぬ紅梅屋が花の小結へ(今)いまや此内に勝るぞ社
臥一ぶやとて評判よ源なし　当るやみちやへ(ま)名古屋の
一筋取り行ぬそのなひ筆屋まで一ちおそ花がおそよ
くて参て近き頃は此をだんがひつてまさこの頃は
かの木そよ下花は若松屋へ(いや)おそこのころさて花先嘗に
逢ますおとりそれぞれ評判とく(上)逢し上並に出ます

上上　　よねしや　あさ

(西方)おあさ殿こそはみずま屋の事でつひに評判ときかぬは
是上々の位は合点がゆかぬ安売の外年頃でもおいて
器ならぬの(きゝや)口惜なくばくりの結構ませんこのきさこそ
花の小結富士見原も扨も見ぬと前より踊屋町時井屋の
かゝせる名三ヶ暦より並の女郎とは格違まで節らかし
らやこけいやのおあさは上らぬこそくに名古屋中が
参らこそ後にけい盛みなそ姉こ(かの)おいふの若かどもなく
西小結よ結や又来いかなる友のあさしこりくし名と筆の位

三しまいそれた役おやじ二ツ惣領小説の下長五郎なこふ
よりして若衆の菊衆から娘かりの之刀ち子ふせて沼ふさき
事・それ於段一ツその秋数へいりのしがきちことより
おやじさ母ふなりて一つのひ者ふ娘こあそりへかり就在
夜に留ますさをなくいそく上へ揚るこうともや柄か
くしておやが心ばなどひの

上上

花盛　房

（西方）さし君ニあるこち揚れなつをき出る花の大事なことを
いつもへしとも上手に出してられましの（其丑）いのねもく

おとみんをあさりくらのこをもきこも按ふてかんなよくむきまほうら
かおさんなれた当地に志らぬ者一なれにいられたまませぬよ依て
下の上を白く書かれした評判を能く上演見君さや

上

新紙や　忠和

（其丑）姫はとてかんよふ志やたこの若ころうとちよくい事の
ない若衆なれた姿を舞台に姑さんして中く評判がおぬ
新紙やへ下よりさし内ゑはおこはしく評判が廣くなり

上

伊村乃　きそ

大くらの花夜に留ます悦ぶごさんをの

(きめ)この仕打ハ和の案やより三州あたり　仕打の一流そ
あんなるもいゝこときんちんやうちてゆへその中にいおきそ
さなほどの花橘の名高し此内はなおまんおき松
かぶん志やこきやうさんすの出生しだん花盛へおました
だんなだいぶなんしんこりくねりんかん会そうぐ
さんせ太夫半分の評判があてゝハるる花揃れ義

上　上総屋　左近

(西方)此君ハなるほどそのおやまなこその秋万長へ呼来源
さして評判もなれきつと見ハ大きたる上りでの雄なり

ます(きめ)いなりのどいばんすなぶくのおやながたんで
扨て甚上ひと云たる太夫の外ハ京川所石垣と上原と
して墨染七条二条あたりの勤とそれさいかさん出入月
たま天職又ハ京ハ白人ハ岸の女郎とまぎらせぬるを天
けくして位の高きといふ立身ハ恋がち位の高き稲
根いするハごぶんせぬかつ出入とより西ハ嶋ばら新乃
数々の御歳中に右近さなハ万せそて立花とありさち
慈も掛るる若衆かさこんにて評判ふさに仰せて
聞て入ました

上　（其丹）

山形屋　白菊

さしもが黒牛にあらされど京きゝの菊の酒にうつり
よりても神と立れし菊の名の七咲の桃子日咲七主人宿
菊畠の文段よ咲出んこなりて菱咲の花よ粉ひハ乱咲
姿は三年んこ立段の濃きさゝの名ふくかくかゝりなんとかゝ
菊よひより一念か化菊の花開き九月菊見て
格段花形京て百東菊格段筆て有こ揺てかす
椀三七百菜も竹山に花白菊は折てそ初むよ暁ハ
おきまどひたるきぬくと初西ぬ人絶けりなり　（西坊）

是れこの相手とさん作花の菊画一の作巻下家こ居
ひこ年ゑ上のことに芸意趣評義こは絵りこいて言子　（きゝわ）
されどいなる一ゐ字の大合せしとかり格まておかハ
言ふ花評判が元よいでこきのじく筆かりよ情ふかく
うつくしく花のいろしのにおもしいでこそ花有［illegible］
召て上吉に似たれ花形よ小絶妙筆東川格段三度だ人やんき石と探り人
ことさらめでたにおりまていふんまと

上　（古安）

剣屋　小念

ひとしやの真像ハ付小念負こ格弁老この衛立にも名高く

まづ人の気に入た若衆とて見物よく〳〵あ待かねたりと祢

ことに器量もよく芸ぶりハ大前也と風呂をとれ共ハ評判と

ぞんじ上ノ揚ひとみへのそりまして

上　千年や　こや

(西坊) 千年屋殿は初より若衆方の能者じやとかやきこへたお江戸

と見へ(おさなき時ハからりと事の(きせ)いさましけなる声が

ぬまさひ上総ふ西らしいえ木綿屋にておつてぬなりおむめ

お、当年ハやさりの大中リ子評判よ大でよめやらいさんみち

まのまで大せの新初より千年屋にて若衆とれ座元より思ひを

は怪つく前髪の評判が悦び始まりぬく

上　笹花屋　こきき

(西坊) おごひおよひ主筆する笹花屋の若衆は先々ぞんざいの

(きせ) なるやどこの若衆としく生れつきそてあら母投身てハ

たむれさき女形色ごの仕評判がよく御いと積ちれ有に

女見飛ちて色ともよきごんせ

上　笹花屋　志あん

(其女) こなんハ仲中芸若が当ざしらえりてこふよくえるよく

なりつてたつ心がくまで結構よくひいくとのれがは

容色よりも情ふかく言葉もやさしうてしに器用数寄の一番がけ
京屋町へいおかうらゐとふておかみたてしめさん評判
ら縁の心と晴ねい大ぐらのいつも客なくみえおりくの
此面羊人能をしましく座鋪へおやん顔は色が評ふない
いはぬけふしで思ふて君が代の足へ入る筈なをおぼしめして
いるりんな

（其女）
上　　大黒屋　さと
吉文字屋大和屋吉中屋と縁をもりて加うしおもく
とりんから[illegible]ほかは鏘加葉花やの数奇さんら放[illegible]

よく流行ま左評判もさのこ女形の戯に重だ上く
吉位もの人とおもし首多花に出男めして上方心を
おもひ出しのなり出へは立役の戯に入よるの評定りけ事よ
重はおもし此半ぞく

（きや）
上　　千年や　佐野
こおさんいさ地うり茶女こさんけにおせが誉きい女へ母
よまへより紋まをなんだ公ていまでら事となりし身
本いふて男ん[illegible]したけ客とお思の風俗い御かしまお
重敬なりてさい御しの文紀をらくこめて慈悲つとすかつま

迷ひありて信ずべくかつききめの梅ありていゝこうかゝ画し
こゝかし法華おしへ三弟んなるへ

上　大黒屋　きぬえ

（きぬ）此君も吉文字屋より出てきゝかへしてからかち
わんねよひ右大黒屋へまゐらせて大黒屋がいとし立役の花魁に
なりかゝりんねのとうし

上　大黒や　それ

（其八女）この君は新屋のかむろとしてかゝりかね屋に
いちんせん評判ともしろんよ大黒屋へ出入の後見あるさんぶるめ

評判と云ふむかへおくりまするので評がわりやんした

上　扇屋　てう

（きぬ）ぱらあも姿とよくひくとお客をあたゝ君なれ評
判がらもよい頃上方へ出ずん事云へやんした

上　一文字屋　一こと

（きぬ）上方へ揚げたではない此君こゝろさち見ぬ花の能
色敵みなりてかくりを隠ししてむ悪部の芸し揃えて
大だゆふの名さハさん二文と云へど一文字屋のこゝろふ福花伯
座中もよく顔にあさん上く思者ハ限でごさんなれども
なしれた

様とゆうる藤よも合盤を望にはゑんを先にこぞの元
ゑいよんなどがのわけて家ん風多くい少んを来たる人の
江戸人は立て来り申すそも上狂言へは地階の若衆
わしにも見えてらぶんせ

実悪の部

(四方)実悪と云悪の字が実にかなりまま若く立役のうへ入れ
のも(共安)いるよりが此芸をかゝります数評よ立だら心を合め
立の見せるが実悪と云役者は立役よりも名人と演この事を
申します悪とも見て実有役也け実悪の部へ入り数多
名高の人だりとして生涯つとめ評判重ねて位けたかく
まことかき者ども指南とは勤上手といふものにて面白
をとこきん正がよいのやない

上上吉

佐野川屋　磯

〔西方〕さて佐野川やが水の所へ来てこよりかの出演のおいしかと
こて花のさるさ事又並ずハしうに佐野川屋の月日は能
上品に気品の所作事へは無類のよき中にて性よく当りたと
きこゆるそ此若後にけるくらあとして姿にて話すもそ面白
十八番を致しての評判実悪の身ぶりよい花志かし
立役の能に入て去秋ふしぎひねりや〔ときわ〕まて〳〵お磯
どの実悪の去秋から話記かくハ定めて実意ありて勤
女形ハ是ての道の花を知らぬハ此に成ニ味付し

立るがいなや門院の御かくまり所の女並にて上臈なれ人ハと
目にも付ぬよ佐野川やの当りを言ふと思ふて通須磨き
るのあり是にはまぎらし此志にはよしひとつは中さらんは随分
こなしがよくてたださけさこ立通さや　いまんとて下らさば
て上々の位がるとます〳〵是ハ傍輩見物の請れてぬなし
〔きぬ〕是ハ又去秋女形の前善悪ちがふてる事の　おこのす女や
あまんまの上に此場て去秋にはさいとのなま天実
悪の器量ありて立役に入りし藝なくして庄と揃ふ所の仕
こうとの奇妙色中ての所の役者が女形ハいふなと思への

皮の糠海を志とすれハまづ上さらせぬ所て器量を
落さけらていさんあまたよくおもき返て餘くは
さかけるとその恋やごんせぬ在付けんのていか女
を浮き女郎ごうんゆう前位衣器量ともかますまる
実悪に擬餐人にハ無まじた鼻顔でもかんでもこれ
せぬうそこおもてんせんお殊のこさして信きてこゑんせ
特すハなりやとをすい

識梨花の公書するとんこえて前雨とおびく白粉ハ揚手をよ
そまいしと筋色さ此君梨花の面ざしうそいまさるとなぞねてい
成ハいやふうるとあふん寸の嫌ゝんす雨いふぬちの梨花の実のり
水泥山の味よう泥を好まれ

上上吉　宇佐九　でう

(印)此君ハ生まれよく姿よく丸なり云ゑんじして位備り
宇佐見の立振といひさうら左右や白河殿なまさらゑんよき
かられなとハ此里にて格式の君にはなよ増てもおさる
まひ実悪の所するだん巻人にハおし立役の部にてては
(印)兎人と競くいふとくれ殊なよおさらぬこの君
芸こ有り和くもすれば毛みに座ていかな名たおいせ
さ殺祐定ばてさらして居をとりすなんてこれまで若殺
りなハ上たい無海たゞ又立役にハつけはよきおても白[illegible]

器量有故目にみえぬ所までもぬ隠心ありして手はく
家蔵の家庭に詮義の若しらふまいりて実悪に拵へて
ごぶんをもりたてまひの

上上吉　笹屋　まさ

(西坊)京出生遠くより下りてまいり切用の家庭の役迄してもお政く
いちりんの家庭をさこころへもよく鬼取下りて若首て笹屋
の立役おとこひは無ふ君し名古屋中の評判をたなり実悪の
実役の立役より下りて又こゝひ役の役にしまへさい
(キヨ)いわふとく笹屋や[illegible]天王と評判の役人

君左実悪のこふの役にかたしたおとこひ役を立役の三ツ
社暗りまけとハおこりもつきまして実悪を拵へたき知
大役付つき分の家の人を拵に役せきをつかす大坂
拾天狗女形をおとこひなぐさんでも一まいは足上
ろうかけこの原のむつさいちまして天上の評判をよふつまる
かたひとしとちでも詞できこうまぬ若衆をに下りてよふ入
てこいい上方はかるふ一器量よき家さんのはなしてこや
むまくおとくるハ名古屋や江戸よりふたりしのぶかつり拵へ之人
にはおおはきつい役て見げたれ者を出逢はきゆるんぞふちかう

すへて芸をハある口いハげなさまさんの権ましんし
てを立役の飯そでハぶんせんれいだんおてうぐのいきさ
かし事二流わり其右三の座に出来きさかずにて七
口京なつぬでハかろゆるしてかん坊

上上吉

（西芳）宇佐見やの内ぞ若衆の内ハこの君おてうぐより　宇佐九　きよ
おのいぶりて此君ハ何とそふ事哉（きよ）よいすの妙ん
いりんす無り宇佐見そ家女なるへきハ此君こめて是量
きやうのまれ出家し一と匠おてう色にまけとハれのいこと

此芸のおてうぐより位がない故此君坐せんす此の君
座村より見ずこくつんゆる道量有故実悪よ入て
こさんすまく利し深ではわしのころる味りのるて
あさんすこうましかんはとなんしをき実悪てハよく口白の
ほさんさや

上上吉

（西芳）此君ハかり実悪の部につまでさハふ富なのハお請申さ　中尾屋　乞和
荻でハ芝居と云道と云一是量ハ上二是量しおり皮を捨
幸十八お何方成人の身ハおてもまけハなぬ利根その

目え斎のちくおそごるゆへてむきさのやく招え都ま於て
掛川みそごちゝ成粉とゐえ芝分仝して天晴なる名
女形おは及お政役の節にハ年も迄ぬ一二の位ゑ到り揚
給へ（キメ）いゝんをやく見ハ断やきかくハ結宴ゝ迄なれた
降りかゞりゐした所より成位が倦しえかし梅（コシラエ）ニ位には
猶いさゝ評判の座ハ見てりへおんして也ゝり今のが能
ぞ／＼

上上吉

（中坊）こ所ごもな世実悪の部をやとゝおそつ中にいまぞ奴

千妻　せう

ひとめも姿も揃ひ諸つまく妊と揃て一思量ゐたはこうゑ
こなし見て八大きに位が吉若諸芸へ揃てよかろ（其女）
いゝんとてとくいきゝ諸つよゐの几二扇中に並ぶハ白し
いかなる様なの奇応てを揃申すゐぬ此君よ座へ
来して見んせさハしなんしかた藝のならひが出に浜成此座に
此若木屋此包ハ男に並し花に藝なき此地を見れ
出ます

上上

（西坊）そなゝ座ハ掛川て西川やのお政役ゝ日き信ました
よく来本地天ハ王信あをかゝこお新と見嵜た此家へ

大松屋　花嵜

口出し 八代目山形屋を初めとして味もよし かけ付の若は
沢山よりする （きや）おふさんとこ越り吉ぼうの秋大松屋に新
艘二人ハおらんさて中々ともに揃ひ 并あい揃まこととを
若者にて座称とて大きに評判がよろしき前の若艶地風
も おふまいらのこりさる芸ぶんで此位合ふや見へけかる也
若は実悪のまいたくなりまや

上上　　　　　　　　　　　松能や　　　さよし

（西方）おつしやいハ能くまて おなしく若は足て能く揃は
より出へ 私さ若衆にて能ますます評判が宗次くまと（其次）

給稼く おつしやいハ おなしとこまでのて姿を揃て浪の
よく立ちしくも何の婚そくハ なけまた能芸は高時の
大あたり見物へ 都しますお言ハ 相見てらふからて
立役に入 若なまて羅屋の月もて切て出り器量者
なれ実悪の部に入めんさる

上上　　　　　　　　　　　扇屋　　　きし

（西方）此女形は いきちの浮くこころのこころの隠なし
評判ゆゑも 姿を立ての揃ふまひ若衆の動きい揃てさん
扱ひまを よ（きや）いらんまとと 利すりぬふい おりはす給た

おまへ様は詮議故に難儀では、お気もたはんせんとござんすぬ
私が才覚もいらんまた（大坂）早う投、わけまへ様、おまへさん事
互にやうふびんし（きやう）何事もむせびなせしようかい　たい
新造や
上
（西方）其張や小（入）の時より、大事な若との評判を取た新造
拝武（入）の高貴をとらせ、侍身すてよし盛を衰し（入）下に於まて
先者動と分て太道に切の（入）若衆新造の立様は成
わい実悪九郎に（入）で上方の格も（入）がりに上（入）重しや
（太夫）なぞめしさんごすかぬぞむかしの四天大神地神でも

大夫しの評判娘よりも中に地の評判よ高てミツ鉢
新造そではかゝいやよりおらはなるまいしたなほ重（入）
んでも家がおたいは切るじけ常体に見（入）ます前に町ふうり
から内格なんでも野くさいまひがのむしの名残が見る
さらおとりまいまするよりがら（入）ておきし色の上に揃まぬそいな
上
中尾屋　たい
（西方）新造のおさいなまもおと古法よし比なまでは年頃の（入）
ましくお猶なとなおでこれ（きや）いんなりおちやふびんした
ありかの侍衆女郎の上にたて立をとへました一意地をる

夜中踊也へ口入あれても人の心にあはぬ若衆也けり年大夫に
人の知る人ハ皆結句より古若衆をおもひ出しぬりやせぬ

上　　　　花屋　きし

(西方)思ひきしろしといふて東花屋三人の若衆なれ共
おもしろハ次第ありたる事れずしてあまり見ハどふでつかはる
(きメ)右三人ハ評判ハ若衆まへ花ハ若衆若別ちかし
さ様ハ若衆とこにゆる藝…
若衆と並てさかん也評さんが

上　　　　岩井　小泉

(?)此若ハ秋山歌舞伎にて始くより名古屋ハ名をつく座元
ちこにても手元の名人ハいかなる…
すくらの格なとといふハぬ…
なく…
…

若女形之部

上上吉

錦嘉屋　一斎

㊫錦嘉屋の若女ごゑ子てハ元でんらく座士日のおハさた座は
わんた四の大井寺まて出るぬ人なし能中当地勤上ミ部之子
数日に経入の日ハ大部りとおよしの第一番と立座判出平池極稼の
軍治が亜施ハ次に参れ村ミ勝が神代の春にもよし歌舞伎の者まて
なみなミふく曽天ハ事にふかされなかきさまミ足入の評色がかつて出る
店おし世し初より四中がうるしくるおより参する今まんとけし殺笆に

うへきを立る事ハ如来より化仏と申し仏前に盛なる花に
極楽御目見の砌是最初の事なりけり始まる
名付く桜の花一枝画と相ひ扮ハ大師の御容の紅梅未央の柳
のことくのいらへを立に始り六角堂に於て其儀式の事とも
家のかんつる花の月日を世に器量骨柄天晴三十二相と云ふ人で
誠日本の事に中にも中心の情からしこの頃降勅使命にて
丁百人ほかり計りと云ふ築地で百合の姫百合の花の姿の花
女形上ろふ右粋巻頭に立ておいてこそ名をもとめ
庭いはく入道のたまはく[illegible]巻く[illegible]隊

姫ごぜは京もち都風にてたいり風と云ふ御室御所風が
あるなるも是已に世話の前にはのまゝきさ風
でかりた入道て和泉ただの姫いんや井の内なる桂太子世界と
云ふは京の御所江戸の右京大坂の新町も仙洞の嵯峨山
越前丸室八ヶ所に三国遊女の色の衣紋の新町の本
室町の大新長屋中なれ九ヶ所いふもの名ハ古今の花
花のあさを云ふてぬしやうらぬが参る所いか見立量がよく花
姿でもう評判で巻頭より花作る花すべく流風
の花に[illegible]

夜露のいなびかりはかんとかけてやりはまじりし目より合せ
三寸に常世わするゝが怖さ地て是非なく世にいがちくにて
目がちんじゝりゝ地より這まりてちりけえるふ腰の
まへ法主かゝつきがゝみひ耳が裏尾で眉毛のたりあごが
ぶ引てかけのもちひごの糸もきそぬと縁ゑよとくふ手
名のはかよらんぬ奇おな第らて一下御の第き如をき衣
今世とおりかての二ちと出深てよりおきにし深判が扇る役
国の大君が立縁しおとし事で若ぬ恋ゝ出ゝまこ鑑なゑ恋の身
恵しまゑつよしの常中ちんとさ出なほ式ゑ兩れ折にれ如も四元

此廓へ此町の光り越れに七ツ時の太夫の奇が大海の立ちい（真女）様く
こゞすゝ目のちんおせきれよまふのさかぬかふもくおにはおすふのは
ろふ石がくとめ吹きてせうまてぬごんもとこふれにる
さくなみひの（綾の下男）是とも見くいさ是の分合意目くしもちくやん
れむりしがあきれ
ぶりりかけやふ、大奇目の花のつまのちんぐの月おゆへをかさ上越付御
彭目ご顔ていりふけの位の扇へよゆる帝かいのこれにいる平気
すれもこゝれ帝さゑ中語色てみへのい銀けをそいだん
大や　かりがくとこなれ姫御門若人生嫌みて並て宮良
ごは椿遊ゑのなんの語善ふと及でぬか奇んとらしつり帰語

親父と上へしまゝせ〔寡人〕威福く忝なきしあはせにちかへ
なひ親父ともお心に出せずいとおき給ふなしやとも
姫むかし返答なさせ〔其女〕なに云ん出し笑ひさうでゆゑ
しく親の母よりり語て綱にしうらこそ巻頭なしぬ
座が後が立何の大切な中ことを立ずいき法つくるかこ
いんとうお立利さきんてきゝんせ死別の茶屋の娘にふて出
田舎笠度に組みく親方の母の度じめて知れぬ事想ひ
下さい合に持てよふ孫のそばでぬ里もおかしいかゝて延
男がいやし常是田舎に親まつりこのうんなんが王下母とし

物あし先業の親父でもものゝあるふもないしよいなうらしらが
帝も天照大神後世にあさんして御座あらくる神の親なる
親後を定りてそれつくるを雑ゆでごぶんと今一人ハ女文
も立せぬのハ王位の始文母を勤にげんてき親方仲間の
女房の恩言悪婆縁組めりし婦じゝこれ男が孫く父母に
立よて陰く断なれ生しがんでくるふかなたぬ親父ここで
さのきみれ中梅いいるまでいし　親ようふ孫くハ一番出し
子きハ独なわれ婦こさふ在月意ハ三津ハ御所勤たる女立と種は
立ごし　むは是んなお年やきしに大丈夫を迎れ親をなかりん

年の内は恙なく暮しけり旅之行衛参れよと申んし仕付ハ
ふきやし難ハ要ならぬ花子ならぬ子と知り左へ候
ごいし花ふハ斉人かその都の上手にてハおよばぬ小まへとよふ
たてまつる都を取ハ諸へ極りある廓中出逢ての合点
ことよハ定りし富士見ならぬ名所の花盛にしてとりふて今日
の芸厳の志はなりやせぬ白人ハ仕立ならぬ揚屋を志ふ旅に
揚屋へ参さんことふの振まし丁度に揚屋を旅一人合点
此までゆるして此の名古屋中の噂いはれて御て芸揚
揚屋茶やくるしき家合揚屋にハ斉と詰いくさか一斉が詰ぬ

斉ハ名古屋なとの志やしきふ[illegible]まんの是に借けとの
かくり遊んしたら揚屋して世の客人ハ口を説に
お斉は[illegible]ちやくことに揚屋のおこりより国中勤
分子の斉上寿ハ世揚屋の斉志やくと知らぬ人ハなしいま
志らむをおまへもさしこめて参る人数志やあるなら
名の[illegible]て見え[illegible]人ハ揃[illegible]も一生にいけ
大坂の[illegible]あまたハ斉[illegible]ちれハ[illegible]の
でハ[illegible]よふ[illegible]かかぬる[illegible]ましたお斉屋
位ハしがなく[illegible]

さのいかにもかやくとして忠敬ならでは若の仕合しが
銘角よおもひまする是れ村のちんでよ急にてありき
婦り御一風またよりての事も重真の八文しとせり
御恵やかにくでい急の神左れしのときの先といふ
事いせんも大変でもかよの見れ梅の実ぞ論義
さて若殿勤めのいなし氏のして王の無よ宗今も
毎こんず思量のないといせんもなれた二次の井水れ
那御に信濃なるなき人の手の挽あきえよなうれくん
せう坊建西町小路の伊東氏女と託一首又哥に

事しはつんもの二十歳にて若忠兄思量すてなりくせもの
孫兵衛といふ極若は里にはおきんすかしらでござんす
今更んものはおんなの事かずなけんで心にかくまに
宗規よりは忠敬あきらまへものでもいかんせかいもんき
よいものの世のさいの事もいずしの日中の皆さんのこのま
むかしせひは相撲とりの法橋さんの事なく小西那はたいたい心
地よいひかのく彦九のすおこころよしおくみていの
かんせんうりさき見し小野小町の巻てさきめ訳への
お哥なくさてんとの事かし松田ふえんなあきなさとも

面はかくさんすかんこやてき客多く諸事に揃ひたる女なり
ゐなました繕ひしお客はこちら様もかのきあまたなれは
それさ也とゝめやうにかはかさゝるあつてこちらより紀
繁女郎はすお帯なかさいすがれゐのちゝうどのとこ也郎
とふ合はお流面白うしんせす様とはさてお人毎より
深のさ也はとくなさのおひはおまへのちり紀也やきれもては
人まへ執は忘らす伝好の繁女はなりく　嫌りこそあます
こちら間をいてもんをとお客大吉郎とおすすめ
ずんのよし奇郎の方に見てめぐみもかれのもん立役に

なかんしたなり大吉郎評判よく名古屋橋町にその名をしらせのと
人皆と参なんたちも手にこし大吉さんの立役の大事にとうらん
さんの極粋まづ道の大客ありき客さんよくとはれ久道の
伝受は語んすあそびて極の浮は深んとつらり七小指に
かりそめも思ひ中の様なひしも中さんすまい　天晴女郎
随一のいきうてもしばお客多し目あらし

上上吉　　ふきや　こゝこ

(西坊)
こゝこ郎と二番にてあたゝた中るいはいのほいく安好形さ
まづ中さぬはお帯は当流流行大当りと成対一番のぞみよし

手柄家でござる所で世の御取はやし藝ハ手を打(其女)嵐和七若
書きまてもなかりし先ハ今さすが都よりもとりし
こなた様より此所にあらそひ藝にて江戸
芸量の品所に志に思ひあってこゝかしこ心中あはれも情深く
今年の顔見世天晴んなる女形の進…
重ねくりの評判役さんが列し実ても評判太夫
もとより是の上方も生まれ替り付評判の若
女形も姉さまにも評判二ノ在所梅手々の段
所々さまきまり次に候ハ大谷作ケ合て評に合ハまま

ごぜんすあるまた沢村より川様の役所評せんとてござりました

上上吉

(西坊)沢村の評判よく渡しての後の役者の評判 役者也 大坂
若女方のお浪ハの場所今のお浪ハ芸もよく役者の元祖と云ハ
評判をとりしハお家ハぬっとあるとて浮世に隠れて参る
情ふかく和者の相手のお浪の名にかすりして素しかる
猶小の大夫目見えて評判も今の評判を心が
うりよりの名を浮かよりの様をみんなる浪の海さこの
数く名の実相の評判の旅で始ます評判ハ藝のこの君

若女形のまたなくは都の花丈まされば三番目はまたて此里の花
石付とはなし中ごろから(其女)こう人を清はみな死ぬ事ぞやの
皆さん南梅の如く風流まで評判はりのへ人は由四郎の色すれ
ことお丹は其の評判はかよふしこと此若は勝絵やら
河の香河鶴角なくのたる笑ふらしやよにげてきさん
せしと放さぬ酒呑好きてふ人さんのうち太夫様まできさん
ました都はのすゝむの名は此のお浦はのあてくりしてやり
三人命のまとさん全会の新艶になりさんは誠さんのそうかてさ夜の花の
ようれ清はらしえてやり入候

上上吉回　　　子年や　　　出

(西)おきしは三年先の夜より法花寺の精枝で大きくよそをき
前しき東大次親幸の空殿と言う先ちとりやこ地の
父子のうち一二とあらそふ若をにまさ名年の女形前仙家子
より二十六八より揺まてる判決仙さんかなは一番
ところく二番のおきしはなか年お清はより先へあしき都の
次女らがよ(キメ)なる新まを評判ありん出て宿おその都の
上揚げはまをぬさの地にはしさんは宿でござんすまするこお酒は
川の色成の太夫ことの玉須とらずましいさ若衆ぐるわ

めてより大きに評判の高かりし上方の中の秀に近く舞
台にて出し某又芸にも秀は女形の座頭か家へ行しさか
今を盛き中なるより口人かいへし是ハ敵女の本役の殊にて
おやかぬ喰なんとこそなし下も静かなる上文句に面白き事を
ま次第なりといやく

（西坊）
上上吉
さし諸芸へかゝりて叶ぬ君とあつさち書するまて
もなひ人の芸用は若衆京生れ古郷をふるひし一夜を
ふれの若衆に肝に此さのけてゝ一取せぬおきし事は
　　傾城や　　志ケ

歯悪して評判の高さこの佐が松をこす評判なる人数
て当時なる若手なる人の歯のよひおちたる役をと
なせ上に揚し出しなる役者（きめ）なる役ば松風の役は
ゝ似さる評判に道中ゝんらしも名代迄せまし
おもゝゝハ斉佐女形の一二段とたきとさ評判の名役者
捨てまさまゝおもかなと記の次に重掃した

（西坊）
上上吉
文こさ小女形でたらんぬさ役しせしやし名人と
評判ふ名段し大事の様相傾城の道相拍子かく
　　傾城　　い諸

此芸風の上手と出世と揃ふ君お披露風のうちへおさまり侭じ

(其姿) こなさんハ切なる事といふんすうあふるちハなる程く

大きさハ尾えて覚にゑんせし今二両年も見てゐお芸風の

うれしさ見ぬ君さへ時は新艘若艶花でお婦女の心

見はにうるみあいうるそう妙なかづきの羽しきになる計

なる花お根かりかり思に思ひこそしたまへ

上上吉　子年登　なこ

(西坊) うあうちハ京小次です藝も位も器量もそろて若女の

名子の内にも若女形の輝ハなんともいへ生しまヘ洗り流して

容顔に恐れたることに常に切られて今てハあふれぬる投しようが

幸ひる影女の風しも気前也評判ハ君もえがりおなじみの

上白揚もてすゝぬく(其女)いらんすこかりとうし揚ゑ

てくすゝぬがお父とと並べ大分賞にゑ世二の

ゑみん勝里当六歩もえうすんし十八なし二分くかしてとめお父ハ

此年評判おとり評判ありまにハ若え八月も上より此新艘を

二まもよりハかよれ也身の仕舞の心が見てこ両三や

なれさとの評判あり名若ハ洗りよ見て仕子者宗れ

こあ花すかいゝなれ外にあり浪風勤めよ見たかくゆきに大当りね

みつらくます若女形ハお斉なれ事しとよい加減と申ます
この浪花も数々もう申し夏ゑだよいたゞ中でござんす
(西方)
上上吉　松嶋屋　里こ
若女形ニ娘達能屋へ来てる方が気もかわしきお里こ
くことさへすまそふて書高にはおよぶ所でも無し霜月
町方一付星名をさ評女方の大当りせう逗に持ちとうてある
末頃えとぬかりなく評判して若女方浪花より語のそそ
むしそうつかさにほんにくい左りくお塩屋の上に揚げ
てるもすりや世ぬかむ女方ことを右の話すの其とはしく　(甚五)

ほめりもきこ若女形浪花の世上の評判が高ひ
落出しても判ろにいさんせ
(西方)
上上吉　大黒屋　らく
吉文字ト大和屋吉中よい方と評判そろふて若女形
吉の字のおつりあなの振袖を染て男山ハ嵩形をとおらく
相を似りやおもしと評判の頭取の大当りハ浪の
弁なくらく天晴れ中で十人が十人から思ってる社評判が
そうこ事の男も人が恋ひすこ能くそうな大当り
君二人と上にも出るの　(きめ)　なる程と是ハ松の新めて

諸芸にかけてとられ者じやが小芝居でかりにお勤めに
なされしおかたの又評判とさきの年は大坂にて評判と
見へしとしいたるこの身におぼえて

上上吉　（嘉七）　一条嘉七　座本

先には当所の評判の所で数の芸者ぶりを格選ひとおつ
きつたがそれをここにこまりて居ます座本のこのかたち
きやつし信はいかが思ふござんす格選すこしおかしう
こちの芸の座本と申せども御よさかないきぬきて
おぼへもせんかんせぬ此のがちようえいいかんせ（其）ちやうど

つよおかしたのきん其の芸ぶりかきにはやた上方の
鴻原まて若男がたを通り見さいて若衆の上方通
かまりまする座本には初上方へのぼりて芸にさん
さいまの芸ぶりいかが思ふておかんだいのたこのからも
よく芸の是は仕入を信は附こそけなくて芸よふす
まんが落も粉のあるを勤め並上方にもなき
下臣花井まではせれにおもしろし是しの弟から子でも
おかぬ谷段ざんがめぬこせ稽古は初上方の花は評もんよく
女形にてなりのひさる也芸よりも二番目にてここに

おかゆがからく仙台人の兄弟茶屋では上上揚屋の梁に
大夫職の位は何の時分全盛の評ばんさつさ光半
おやんちやふぜいやないゆ
実や兄弟ともに庄の花の盛りなりとかれ
むせる風のすりきしてもまつりすみても実は
花もつらしいはれん一日度い花明暮日本一大
此体と覚行の影か

上上吉
（西）さてさて今山は山の屋が大間口信ありお人の器量はきさを
山形屋　金山

ここのろちよく世間に知られぬ人なく誰それは器量よしと
一二を競ふて
（吉）こなさまていふ人全盛お花も言ひ評判も
高いこのあをもちふしていふ山形屋の花ざかりと言ふまでなし
世にのうし此配は御の位ことく庭生の上上揚屋並ぬ
かりんそいろんけても上上はかゝぬをもしきんどかりやせぬ

上上吉
（西）この君は其の一家まても親そなんの印もなき
よき仙洞にきよりきや此は松の風と知ぞ
（貫）おかめんすみかなん大松風に花見ころもよきさ言ふすゝ
大松屋　今山

なひやうし合山谷もそろひてせりおちの㒵からうて將福の
評ばんがおちたし上々よろしき君篠あり首尾のすきが
ゑかうび京方にかへりしい[illegible]敵も上手にて[illegible]場
評判がいゝおもしろき芸者人のたいに居ぬ君

上上吉　（西播）　一文字屋　如月

評判の能当役者といふ若衆で器量も見事にて慶ま[illegible]
あの振廻おぬきも上手の上手さりとは面白き事じや　功有
そればかりか若衆の評判が大当り京山でも今山でも此様に
見物の諸人がよしなとんだなるまいが（きよ）なる福この

君のかほぶりと利口て芸はすいりんすまく京山谷の
てゝい益き芸の道まても揚子ごんまで余所ニ名は
能ぶり月がはり西ともなく不繁なりしとてのぼり梅の
おゑふに能月也（西）にてもないはすぶしまへてまき芝
評判のさえ所ぬけにきん世雑役の風がおかしく年々もあらん
こころよさの上に揚さんもくり見まて此の世ハ当月の
又も極し

上上　（西播）　一文字屋　松屋

若やしにおいて薮屋松屋にて評判はよい若衆は時勢で

結構なるめと〜器量よし お稲れ若衆仕打しの上品物まで
如月〜より〜きさ君〜位上位へ出されし（其女）いろ〜全
三線の評判名高き紀事陸あれば〜若女形一文字屋〜[illegible]
〜君〜〜の全盛〜〜〜あひ沙汰には〜さん〜[illegible]
〜ぬ目次〜つよし若女形〜追付上々位には上りのふ〜
怪〜〜〜〜ん〜〜てる〜に〜て〜さんせ

上上　〜藝　たミ

（西切）この君も上り口〜〜が家に〜〜（其女）何の〜〜
入〜〜〜〜〜〜がひき〜〜〜〜の〜〜小〜

〜そ〜〜名〜〜〜屋〜〜〜〜〜日〜〜には〜〜大〜〜とこり
〜〜〜てこ〜野小〜〜〜大評判の〜〜し〜〜し〜〜の
〜〜〜〜〜〜〜〜ものち〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜しより〜〜〜〜一番の〜〜〜〜〜〜文〜〜
〜〜〜〜しか〜十〜若〜には〜〜〜〜小〜〜まで
〜〜〜〜〜〜評判の〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜の〜〜〜の全〜〜〜〜〜の〜〜〜
器量よし〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の沙汰には〜〜〜〜〜〜〜

志んかりこ庭を掃のへきこ切ら花宿へ弟んかはなし

上上

(其女) 宇佐丸の名より新そ恋しき君々と人のよぶりた　宇佐丸　志ん

君もそこハなうふかぬ情ふかく世上に揚さい

うりよおかりし程上より次代まで有に弘めん

弘祢んなりすまんきみし大評判を給て揚まもよし

ちゞやさしのてこよ　ヒショウ見てもよし

上上

(きゃ) こゝさも長寿一の名字こゝあとさしこゝを慈し器量し　一香庵　難波

揚こ上ものこそのおこりはと評判きく君々へお好んかの月

宮殿に付ても評判揚屋紀元次第に宮中に名を広

雑度の名家せし元々を志通と盛りかへ来時かく

波りし日ハ参とやさらんせぬ

上

(其女) 若揚屋の出氏なこ同し日九日揚屋も出馴き万安まて　一香庵　大吉

大名なとまでも新しなくなひなゝの地君々まし元次世に器量が

なゐゝの評判夜付宿に弟んす山形の白角なと同格ではお名か

こゝもがら代評判がきゝせぬ宴成算てもよんかゝこそ下ん揚

上　大坂屋　小松

（其女）小松すゝて根引のまつとこそいふるもことはりぬ大坂屋とお卷
かさね何の似せ二ツならん若上臈といつれか都の人西
ふかんかんのちらし

上　大坂屋　小野

（キメ）あのが名は小野とは小野の小町かや詠えけるしのをとる
ひやきかつての眉墨旧粧し鏡の影の桜のしたに
内て申しきこえ遊を思ひ深く寝ていのかね如て月を
紅の粉をいろ君が昨年百日の安車からしつる松のけの

都して年の様のなだけ生の光ならなかの川にて
おきやんす

上　かな屋　きの

（キメ）きみのすそておそくいひしらぬきを越てきのかひきの
よひをてるときのよさきみの世にけて越ることを見るきみ
みそをうけてきみの心中をつたへゆきみの恋をかなへ申て揚け
諸事よきのおあいそせんひの花

上　大坂屋　ちよ

（其女）大坂や二人の名のり中をまつ上ゝらはけし君天晴能ひ

佐倉しかすれおりぬ衣裳に気あんす風のせんなひ絵でもなうて
立役へ免さぬくしましてお若

上　　　　　　　　紀伊国屋　こよ

其女 あまたてこよ器量にては振のよふによい顔よみとひ思ふところよ心中ものふ器量こよ謡もよくよく立寄るも見よく踊りて
評判も立役にも付し見物てるときてみなよかりし

上　　　　　　　　子年や　志保

西村 女んこでようたかりて声で指ましたるて此評判は都一の
此居は子年やかてこの冬の狂言を外の芸者にもよく器量の

子年は八歳よく此様の若中に及ぶものは芸のうへは立役へ今
おかし和いろひのおかたに評判いよいよ

其女 此娘んこそこの若
いろんなもて諸芸の人は歳もなくまいりの評判もよい又
芸有り器量よりの上手達へ出しも揚気心ちに二番の秋
より所にもて評判の芸をもての娘くは実意の
顔に入て上手なれんともさりといのもしに聞へて格

上　　　　　　　　綾瀬屋　姫さ

西村 いまさそこ評判もなく若き風の此ひちれ此桜まで
名こ座補るし色おいて女郎八繻や花藤遣者にて声よく

悪筆とやはれてこの嵐三郎ばくと評判中々さ扇にも
さらし物の君でなし先刻くさ藤ハ引きぬよ（其母）扨こゝに
世に述りさしたる評判をなくこちら〳〵さ若衆髪姿ハ随
なされしさゝんハ色敵のくせなるも初てこさんをよして
おそらくんす藤娘屋内ハ物なりよかし芸者人と
いはゞ何ぶんよし浄瑠璃より其の花が杜若福仙さといふよ
まり芸をおとよろしく

巻軸
上上吉　備前屋　その

（芸）さし若ハ何役にも軸に乗りて（評）さ星にはさ若嶋所作訳よし
あれたも久方切して櫓別話説万狂言ままり人ハおとなく
あまねくも及ぶき事より悪筆にて一狂言天晴若衆娘
ことに写る藤きハさ若持たる悪筆をまふして実悪の娘に入て大極
上上吉なる役まで切り細りしてなんく時色で稼ぶ嵐にたに
甚ぶんの傳けは五役に立役にも今の褒め肉不足無様が勢もし
よりてうへます〳〵さ星は立物なまして人気でしまいりて及ぶき夢の
おせには世にたつべきゆへ若衆立役の大軸也繁昌の柳々御評
とられいよ〳〵物語なし

扨坊主女に向ひ評判ありおそらくは我等和尚ハ[illegible]中にも
中くらいなひさて[illegible]よく[illegible]掃除坊主の
名物なり[illegible]の庭に[illegible]
女良は迦陵頻伽ともいふ[illegible]
かゝる[illegible]しかし禅と云ふ[illegible]
[illegible]いかなる[illegible]
[illegible]
[illegible]勤すく世良の心
[illegible]
[illegible]

[illegible]指の押へ[illegible]女良[illegible]
[illegible]禅也[illegible]又廓の[illegible]と能覚へさせし[illegible]と思ふになく
口説と[illegible]女郎の耳に[illegible]を云す[illegible]
[illegible]中にも禅也上にて古禅[illegible]
言ふハ我身[illegible]妙なる[illegible]女良[illegible]して
[illegible]心[illegible]
又[illegible]
[illegible]
下[illegible]女良[illegible]心[illegible]

魁も出家ある宗祇は二世に似る是元後祖母く辨財天の
遊しあハ増りてむかしは今も是初めあけ前後に鎮まりける
まるその大和屋の編笠茶屋ハ初やハ今の世継が見て通し
夜の月かそし浪花すてらんもおさ座とのぼす十徳ハ
こなさん稽の老人が　言ると言ふて帰る　かこの音のぬまゝ御として
説けて置く男哉　吹かれのつまらさよハ　やつとの若人ともほど
これよの内がなんさい　爺とみる是ハ恨も老いに　譬ハ似合なる哉
女の一念ハごとと世にふれ知らねね　勤めての覚は今也　ちんきすこう念
のいた盛哉　夕顔の花がかも思ひ男がゐなかし中でがおしかりた　こなたの